

一般演題(口演) 助産管理

座長: 佐々木綾子(大阪医科大学看護学部看護学科)

O-48

臨床助産師のストレス対処能力と健康保持能力

○河内浩美 池田かよ子
新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

I 緒言

ストレスフルな職業特性を持つ看護職について、これまでストレスやバーンアウト、職務満足度といった研究が多くなされてきた。近年の労働者のストレス研究では、予防的観点から個人のストレス対処能力の研究が進められ看護職者を対象とした研究も多く見られるようになった。しかし、助産師を対象とした研究は数が少ない。そこで、本研究は首尾一貫感覚(Sence of Coherence、以下SOC)を用いて、助産師のストレス対処能力を明らかにすることを目的として調査を行った。

II 方法

平成25年1～3月に、A県で産科を有する診療所と病院8施設に勤務する助産師を対象に調査をした。方法は無記名による自記式質問紙調査であり、内容は基本属性、ストレス対処能力を測定する「有意味感」「把握可能感」「処理可能感」で構成されるSOC-13スケールである。分析は、各要素を7段階で得点化し、年代別(3群)、養成機関別、助産師の経験年数別(3分割)、配属別との関連について一元配置分散分析と多重比較(Dunnett t検定)を行った。本研究は新潟青陵大学倫理審査委員会の承認(No.2012011)を受け実施した。

III 結果

配布数130人のうち回収数60人(46.2%)、有効回答数56人(43.1%)であった。対象の年齢は 34.6 ± 8.2 歳、年齢区分は20代16人、30代26人、40代12人、50代以上2人であった。助産師取得機関は、専門学校13人、短大専攻科24人、大学19人であり、助産師の臨床経験年数は 11.6 ± 8.3 年、分娩介助例数は 414.4 ± 378.1 件であった。就労施設は、診療所24人、病院32人であり、配属先病棟編成は、産科単科17人、産科婦人科混合20人、産科他科混合17人であった。

SOCの「有意味感」は、年代別(50代以上を除く20、30、40代)3群間の多重比較において、40代が20代よりも有意に高かった($p = 0.032$)。また、助産師の経験年数3群間の比較($p = 0.048$)に有意差が見られたが、各経験年数別の多重比較は有意差が見られなかった。

「処理可能感」は、配属先病棟編成3群間($p = 0.020$)に有意差が見られ、産科単科が産科他科の混合よりも有意に高かった($p = 0.017$)。

なお、「把握可能感」については、いずれも有意差は見られなかった。

IV 考察

年齢と経験年数の高い方に「有意味感」が高かったのは、自由裁量度が大きいほど有意味感が形成されることから、助産師の業務独占という自由裁量に任される範囲の広さや経験の積み重ねで裁量度も大きくなることから数値が高くなっていったと考える。

産科他科混合病棟の「処理可能感」の低さは、助産業務外の多様な看護業務が求められることで、助産師としての知識や技能が自由に使える機会が少ない状況が考えられる。

V 結論

助産師のSOC「有意味感」は、年代別および助産師の経験年数別に有意差があり、40代は20代よりも有意に高く、「処理可能感」は、配属先で産科単科は産科他科の混合よりも有意に高かった。